

第1回滋賀県立高等学校在り方検討委員会の結果概要について

1 会議の日時等

開催日時 令和2年6月9日(火) 9時30分から11時40分(東館7階大会議室)

出席委員 全委員出席

(原 清治 大野裕己 徳久恭子 炭谷将史 高野裕子 樋口康之 稲葉芳子
権並裕子 中作佳正 大島節子 上原重治 今宿綾子 中山郁英 石野沙恵)

◇委員長の選出、職務代理者の指名

滋賀県立高等学校在り方検討委員会規則第2条の規定に基づき、原清治委員(佛教大学副学長)を委員長に選任、中作佳正委員(株式会社ナカサク代表取締役社長)を職務代理者として指名

◇諮問

◇本県の県立高校の現状等説明

◇これからの県立高等学校の在り方について意見交換

2 委員からの主な意見

■社会の変化への対応

①	これからの社会がどうなるかの答えは「わからない」だろう。シナリオを1つに決めるのは危険。そうした中では、未来を自分が創るのが一番確実。そういう心持ちを持った高校生を育てる必要がある。自分の高校時代は家と学校と塾だけの世界だった。色々な道がある、地域に魅力的な人が沢山いる、といったことを経験させたい。
②	想定外ということが何度もやってくる。そんな社会では、自分の力で生きぬく力が必要。先生の求める答えにあわせていく教育、知識詰め込み教育では、生きぬく力は育たない。どのように生きていくかを考えられる高校教育が必要。県内のどこに生まれ、どこで育っても自分のキャリア発達が達成できるような県内一円の高校教育が必要。
③	コロナ禍は学校で何を学ばせないといけないのかを考えるきっかけになった。学校はいろんなことをやっているが、学校でしかできない、学校でこそやるべきことは、人と人とのふれあいや協働作業、ディスカッションなどではないか。
④	画一的正答で偏差値がつくような教育は、AIがあつたら必要なくなるだろう。
⑤	学びが手段化しているのではないか。学びが面白いと感じる機会の提供が必要。
⑥	コロナ禍でオンライン教育が進められているが、オンラインで授業するのは一人で、他の先生は生徒一人ひとりをサポートする役割となるのではないか。
⑦	プログラミング教育が必要だが、全て先生が提供するのではなく、専門的な教育はその道のプロに任せるべき。
⑧	AIによるシンギュラリティ(AIの能力が人類を超える技術的特異点)は必ず来る。従って、答えのない教育、専門家を育てる教育が必要。
⑨	将来は職業観が変わるのではないか。AIの時代になると多くの仕事がなくなると言われている。専門知識や創造性を持ち、自分で考えて行動できる高校生を育てていく必要がある。

■学校の魅力化への対応

①	公立と私立と両方で、それぞれ特色があって、子供達を選べるような学校となる必要がある。
②	今通っているその学校で魅力があって、夢が実現できるというような、それぞれの高校にそうした力がある必要がある。
③	それぞれの学校が紋切り型というか、どこで切っても金太郎あめという状態ではなく、それぞれの学校でそれぞれの魅力があり、自分自身のことを考える機会になっている。そういう学校づくりをする必要がある。
④	公私比率は京都では公立6：私立4だが、滋賀では概ね8：2。県立と私立の役割を議論する必要がある。
⑤	普通科への進学志望が高い中、職業科に進学する生徒が自信をもって社会に出ていくことができるような取組みを考えたほうが良い。

■キャリア教育の充実

①	自分の高校時代を振り返ると、キャリア教育をもっと充実してほしかった。周りには、とりあえず大学という人が多かったので、将来を見据えた指導が必要。もっと社会というものを見せてほしかった。
②	私学で資格を取る取組をしていると、進学校に行ける実力を持つ生徒でも入学してきている。将来を見据えたキャリア教育を提供すべき。
③	具体的な夢のある生徒が少ない。小学校で色々な体験をしていたことが、中学、高校においても十分に生かされるよう、学びの接続が必要。
④	県立高校の在り方として、ともすれば高校だけを切り取ってしまうが、小中学校、地域、大学、就職などとの連携も考える必要がある。
⑤	滋賀県で生まれた子を滋賀県で育てて教育して、滋賀県の人材として働けるような子供たちを育てていく使命があるのではないかと。
⑥	高校は実質的に義務教育と考えた方が良い。義務教育の目的を考えてみると、社会的責任を果たせる人を育てる、その一点に集約されるのではないかと。社会的責任を果たせる成人を育てるということでの小中高連携が必要。

■多様な生徒への対応

①	中学校の特別支援学級から高校進学希望者が増えている。特別な支援が必要な生徒にも配慮された魅力ある高校づくりが必要。
②	学び直しができたり、学びの目覚めになるような工夫が必要。
③	高校入学後に、学びのスピードについていけず息切れする生徒を沢山見てきた。一人ひとりの生徒のペースに合った学びが必要。場が変われば不登校の生徒たちも伸びる。
④	他府県では不登校の生徒への対応を中心とした高校がある。環境を整えれば伸びるといった成功事例を見ていく必要がある。
⑤	大学進学したい人は、普通科高校でとことん勉強するとか、工業、農業や総合学科では、専門的に将来それに長けた人間に育てるということをやっていく方が、これからの社会に役に立っていくのではないかと。
⑥	進学したい生徒のためには、例えば、いわゆる進学校に中高一貫校を意図的につくるなど、きっちりと進学できるようにすることも大切。

■地域との連携

①	小中学校と県立高校が連携するモデルケースのようなものがあって、それが教育効果を上げているということなら、他の市町にも横展開できるので、日野高校と日野町の連携状況を示してほしい。
②	町の総合計画を作る際に、高校生など若い人の声を聞いていこうという部会がある。地域において高校生の思いの発信の場やインプットアウトプット共にできる経験が必要。

■教員のフォローなど行政の支援

①	高校の先生が多忙な現状の中、さらに魅力化をととなると、高校の先生の業務過多になることが懸念される。教員の支援をどうするかを、この計画には盛り込むべき。
②	多様化や格差への対応が学校に期待されるだろう。先生が課題解決に取り組めるように、学級や学習集団の組み換えのための行政支援や財政的支援が必要だ。
③	あらゆる教育が学校に押し付けられ学校が肥大化している。社会を知らない夢は持てない。学校、社会、家庭それぞれでできることを整理し、学校の守備範囲を狭くした方が良い。
④	学校を考えるときに、先生方の働き方も含めて議論していかないといけない部分がある。それが高等学校の場合、専門性を活かすことになるという視点を外さないようにしていく必要がある。

■検討の進め方

①	在り方を検討するうえで、学校規模や統廃合の考え方など国の方針はどうなっているか、取り込んでいくのかを押さえておく必要がある。
②	議論を進めるうえで、教育委員会として統合したいなど、譲れないラインがあるのであれば教えてほしい。 → 前は「再編計画」としたが、今回は「在り方に関する基本方針」とする予定。統合ありきといったことではなく、多様な子供たちにどういう教育をしているのかがいいのかといったことをしっかり議論し、そのうえで統合が必要ということがあるかもしれないし、それぞれの高校でより特色ある学びを提供すべき、ということかもしれない。そういうことを皆さんと一緒に議論したい。

3 今後の予定

◇第2回滋賀県立高等学校在り方検討委員会の開催 7月下旬頃を予定

《主な内容》

- ・再編計画の実施状況について
- ・県立高校の目指す姿、育てたい生徒像
- ・取組の方向性（産業教育中心）